様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６ＫＴ０１８６

研究課題名（和文）モビリティと人の繋がり：国際開発支援における人の国際移動とその影響

研究課題名（英文）Mobility and personal networks: International human mobility in international development support and its influences

研究代表者
下田　恭美（Shimoda, Yukimi）

早稲田大学・社会科学総合学術院・准教授（任期付）

研究者番号：３０７４６４８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　収集したデータの分析から得られたこれまでの成果としては、１）開発実務者はそのキャリア形成過程において異なる知識（例：地域、専門分野）を蓄積し固有の専門性を身に着けてきていること、２）身に着けてきた経験や知識を実務者が派遣された国の事情や事業内容に応じて意識的・無意識的に活用していること、３）ある特定の地域での事業終了後も実務者が現地カウンターパートとSNSなどで繋がっていること、などが明らかになっている。成果の一部はすでに国内外の学会で発表を行い、英文学術雑誌で発表を予定されている。更に分析を深めて論文としてまとめ、関連する学術雑誌等に投稿予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　開発事業における仲介者（Catalysts）としての開発実務者個人の役割や影響を明らかにしつつある本研究の成果は、途上国が抱える諸問題、援助効果、費用、政策に主眼が置かれがちな国際開発分野の研究において、学術および実践の両面において新たな視点を提示できるものと考えている。また、モビリティと知識移転の関係については、国際開発分野のみならず、移民研究、モビリティ・スタディーズ、経営学（マネージメント）といった分野への示唆もあると考えている。

研究成果の概要（英文）：The findings obtained from the analysis of the data collected so far are as follows: 1) development practitioners have accumulated different types of knowledge (e.g., regional and from specialized fields) and acquired unique expertise during the trajectory of their careers; 2) these practitioners have both consciously and unconsciously used this acquired experience and knowledge according to the circumstances and project content of the counties they were dispatched to; and 3) these practitioners still connect to their former local counterparts via SNSs after the completion of projects in specific regions. Some of these findings have already been presented at academic conferences in Japan and overseas, and one finding will be published in an English academic journal. The findings of further analysis will be compiled in a paper(s) for submission to related academic journals.

研究分野：社会学・人類学的アプローチによるグローバル化が個人や社会にもたらす影響に係る研究。

キーワード：モビリティ　繋がり　ネットワーク　知識循環　国際開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

2000 年頃からグローバリゼーション・スタディーズの一つとしてモビリティ・スタディーズが出てきたことで（吉原 2013)、プロフェッショナル移民を含む多様な形態のモビリティが研究されるようになってきていた。この新しいモビリティ・パラダイムには、人類学、社会学、カルチュラル・スタディーズ、地理学、移民研究、自然科学、観光学など様々な学問領域が関わっていた（Sheller & Urry 2006: 208)。しかし、グローバリゼーションについて書かれたものが数多くあるにも関わらず、技術や教育、或いは高い専門性を持つ人々のモビリティに関する「人レベル（human level)」の研究は希少でありその必要性が指摘されていた（Favell et al 2006: 3)。実際、社会科学分野の移民研究では送出国と受入国が明確な定住移民や難民等に主眼が置かれ、テンポラリー移民については労働市場における労働移民を扱う傾向にあった。受入国に定住せず、比較的短期間で移動するテンポラリープロフェッショナルについての研究は僅少であった。

しかし、国際機関・企業から派遣され移動を繰返して働く人は急増しており、短期出張やインターネット等の利用を考慮すれば時間や空間を超えて協働する人の数は膨大である。彼らが誰とどう繋がりを形成・維持し、どのような経験や知識が交換され、それがどう仕事に影響しているのかを検討することは重要であった。プロフェッショナル移民については頭脳循環(brain circulation)が起こっていることが認識されており(Hugo 2009; Tung 2008)、彼らの移動が引き起していることを広い視野で考える必要があった。知的資産の移転の鍵となる「個人」の移動の軌跡をミクロの視点から追うことで、定量的研究に偏向しがちな社会的ネットワーク分析への貢献も期待できた。

テンポラリープロフェッショナルの一例である国際開発支援に携わる関係者（国際援助機関職員、専門家、コンサルタント等）は、国際開発分野では途上国が抱える諸問題、援助効果、費用、政策などに主眼が置かれ個人という「人レベル」に焦点が置かれることはほとんどなかった。社会科学分野では少ないながら国連機関職員（Nowicka 2006)、ディベロップメント・ワーカー（Fechter 2013; Fechter & Hindman 2011; Lewis & Mosse 2006; Mosse 2011)、コンサルタント（Amit 2007）などの研究があり、彼らの仕事や生活について分析を行うことで開発現場のリアリティを明らかにすることが試みられてきたが、開発実践への示唆についてほとんど踏み込まれていなかった。中進国の台頭やビジネス分野との連携により関係アクターが多様化する中、比較的短期間で移動し開発支援に関わる人々の繋がり、経験や知識の「循環」、仕事への影響等を明らかにすることは、モビリティの視点からだけでなく今後の途上国の開発事業(技術支援等)を考える上でも重要であった。

２．研究の目的

グローバリゼーションにより国境を越えた人々の移動が加速している。本研究は、テンポラリープロフェッショナル、特に、研究が希少な国際開発援助関係者の「人レベル」の経験に焦点を当て、彼らの人的・知的繋がり、複数の受入国の人々との繋がりの形態と維持、その繋がりを通じた知識の拡散・変容を丁寧に掘下げて分析し、人の国際移動とそのネットワーク形成の実態とその影響についてグローバルな視点から考察することを目的とした。

本研究により、移民研究分野やモビリティ・スタディーズのみならず、仲介者（Catalysts）としての開発支援関係者個人の役割を明らかにすることで、今後の国際開発分野に何らかの示唆を提示できることが期待されるだけでなく、国際化する日本に対する人的資源管理やダイバーシティ・マネージメントといった視点から経営学分野への示唆を得ることを目指した。

３．研究の方法

本研究は、文献レビューおよび半構造インタビューを主な研究手法として実施した。調査対象は主に日本人の国際開発支援関係者であるが、彼らと繋がりを持つ一部の（元）受入国の人々も調査対象とした。計画当初は、グローバルに移動を続ける人々が調査対象であったことから、地域を絞る目的で、東南アジアで開発支援に関わったことのある関係者を対象に以下のアプローチを組み合わせる予定であった。

１）国内居住者：国内での直接インタビュー

２）海外駐在者：イ）一時帰国等のタイミングでインタビュー、ロ）複数名とコンタクトが可能な現受入国を 2-3 か国選定し（東南アジアを想定)、現地を訪問してのインタビュー、ハ）スカイプ或いはメールでのインタビュー

しかし、インフラ整備が進んでいない途上国ではスカイプ等を利用したインタビューが困難であったことから、(ハ)のアプローチはフォローアップの目的でメールを活用するにとどまった。また、調査時に関係者が派遣されていた赴任国の状況を考慮し、コンタクトが比較的容易な関係者・赴任国に対象範囲を広げて研究協力者のリクルートを行った。

インタビューでは、オーラル・ヒストリーのようにこれまでの経歴を追いながら、他の開発支援関係者との繋がり、複数の受入国との繋がりに焦点を当て聞取りを行った。全てのフォーマルインタビューは許可を得て録音し、テープ起こしを行った。分析に際しては NVivo のコーディング機能を用いた。

４．研究成果

本研究は、研究が希少な国際開発援助関係者の「人レベル」の経験に焦点を当て、彼らの人的・知的繋がり、複数の受入国の人々との繋がりの形態と維持、その繋がりを通じた知識の拡散・変容を丁寧に掘下げて分析し、人の国際移動とそのネットワーク形成の実態とその影響についてグローバルな視点から考察することを目的とした研究であった。インタビュー調査を通して、1）開発事業関係者がどのような移動をしているか、2）各受入国とどのような繋がりがある（あった）か、3）どういう方法・タイミングで繋がりを維持しているか、4）誰のどういう経験・知識が移動し、別の国・地域でどう使われているか、という点を明らかにすべくデータを収集し分析を行った。

研究実施期間中、インタビューを国内および国外（インドネシア、スリランカ、ソロモン）で実施し、日本人の開発実務者 14 人、受入国関係者 2 人から聞き取りを行った。人数はそれほど多くはないが、3 時間以上にわたる長時間のインタビューや複数回に分けた in-depth インタビューにより質の良いデータが収集できた。また、スリランカやソロモンでは、直接コンタクトした関係者の協力を得てそれぞれの国で対象者をリクルートできたことで、調査の効率が上がっただけでなく対象者の幅が良い意味で広がったと感じている。研究代表者の怪我（骨折）や二度の所属先異動による業務内容の大きな変化により調査スケジュールに遅れが生じ、研究計画を 1 年延長せざるを得なくなったが、最終的に必要なデータを収集することができた。

収集したデータの分析から得られたこれまでの成果として、1）開発実務者はそのキャリア形成過程において異なる知識（例：地域、専門分野）を蓄積し固有の専門性を身に着けてきていること、2）身に着けてきた経験や知識を実務者が派遣された国の事情や事業内容に応じて意識的・無意識的に活用していること、3）ある特定の地域での事業終了後も実務者が現地カウンターパートと SNS などで繋がっていること、などが明らかになっている。まず、開発実務者の開発分野における経験や知識の形成過程については、それぞれの関心や状況により様々である。大学・院で学問的知識を得た後に現場で経験や知見を身に着けた者、青年海外協力隊員として途上国開発に関わったことから開発分野に関心を深めていった者、民間企業の社員として途上国で働くうちに途上国の問題に興味を持つようになり開発分野に進んだ者、など幾つかのパターンが明らかになっている。入り口は異なるものの、開発分野で長く働いてきた実務者は、そのキャリア形成過程において地域や特定開発課題についての経験や知識を意識的あるいは無意識（偶然含む）に身に着けており、複雑化する開発課題に対応するため必要となる専門性を構築してきている。一人一人の経験や知識は多様性に富んでおり、その専門性を一般化することは難しく「固有」の専門性とも言えるものになっている。募集のタイミングという偶然性や役職・ポストの形態といった要因も、個々の実務家の経験や知識の蓄積に大きく影響し「固有」の専門性を形作っているようである。事前に十分調査をした上で計画される開発事業であるが、計画を実施に落とし込む段階で対象となる国・地域・コミュニティなど支援対象国の社会環境などにより計画を調整する必要が生じることが多い。開発実務者の固有の専門性が、この調整作業を可能にしていると思われる事例がインタビューを通じて散見されており、事業を動かす重要な鍵となっていると思われる。この点については、今後さらに掘り下げて分析したいと考えている。また、各実務者はそのキャリア形成の過程で開発事業に関わる上での自分なりの倫理（ethic）を構築してきており、事業主である援助機関／相手国政府の規則や制度などとの間にジレンマを抱えつつも、自分自身が「良い」あるいは「正しい」と信じられる成果に繋がるように努めていることも分かってきている。この実務者の倫理観（ethic）と開発実践のジレンマについては、国際学会での発表を基にした論文が 2020 年度上半期に英文学術雑誌に掲載される予定である。

次に、実務者固有の専門性が、新たな赴任地の開発事業の計画や実施において活用されていることが明らかになっている。例外はあるものの、収集したデータから、アジア、アフリカ、大洋州といった大きな地域の枠内で開発業に携わる実務者が多いことが再確認されている。開発事業において言葉を含めた社会的・文化的影響を考慮することが重要であり、予想していた結果ではある。しかし、実務者がその固有の専門性を事業に応用する当たり、各国の状況に合わせた工夫をしていることが収集したデータから読み取ることができる。例えば、複数の東南アジア諸国で得た知識が中央アジアの事業に活かされている事例、アフリカの国々で事業に関わる中で得た経験や知識を別のアフリカの国で応用した事例などである。こうした事例は、開発実務者の移動に伴い、個人の中に蓄積された経験や知見が開発事業の実施に貢献していることを明示している。これはアフリカから大洋州といった広い地域を超えた移動の場合であっても同様である。人と共に固有の専門性が移動し開発事業を動かすのである。実務者個人の影響を明確にすることで、これまでの開発分野の研究で取り上げられてこなかった視点、例えば事業の効果といった議論の中に実際に事業を実施する開発実務者の固有の専門性を考慮することの重要性を示すことができると思われる。本研究では、コンサルタントとして開発事業に関わる実務者からも聞き取りを行ったが、1 年を超えるような長期滞在型で開発事業に携わる実務者と異なり、近年の開発事業契約の特色としてシャトル型（現地に短期滞在を繰り返して事業を実施・管理）の派遣が増加している。そのため、同時期に複数国で複数事業に関わっており、経験や知識の追跡が困難であることがインタビューを通して明らかになり、課題が残ることとなった。

開発実務者と現地カウンターパートとの繋がりについては、SNS および不定期な再会などによるものが観察されている。インタビューや研究代表者が参加している SNS を通して、実務者の任期終了後においてもある程度の繋がりが保たれていることが分かっている。例えば、実務者が元

現地カウンターパートの近況を知っていたり、元現地カウンターパートが一緒に事業を担当した実務者がどこで何をしているかを把握していたりする。勿論、実務者同士あるいは現地カウンターパート同士の情報シェアはより頻繁に行われていることは明らかである。また、別案件で元赴任国を訪問した実務者が元現地カウンターパートを訪問して情報収集を行ったりしていることから、事業終了後の彼らの関係性が、事業マネージャーとスタッフという関係から開発分野の専門家同士の関係へと変化していることが分かった。

上記に述べた「人レベル」の情報の蓄積、応用、拡散に係る成果については、既に国内外の学会で発表し専門家等の意見を仰いできている。開発事業における仲介者（Catalysts）としての開発実務者個人の役割や影響を明らかにしつつある本研究の成果によって、途上国が抱える諸問題、援助効果、費用、政策に主眼が置かれがちな国際開発分野の研究において、学術および実践の両面において新たな視点を提示できるものと考えている。また、モビリティと知識移転の関係については、国際開発分野のみならず、移民研究、モビリティ・スタディーズ、経営学（マネージメント）といった分野への示唆もあることから、更に分析を深めて論文としてまとめ、関連する英文学術雑誌等に投稿する予定である。

Amit, V., 2007, “Globalization through ‘Weak Ties’: A study of transnational networks among mobile professionals,” in Going First Class?: New Approaches to Privileged Travel and Movement, V. Amit (ed.), Berghahn Books, New York and Oxford, pp. 53-71.

Favell, A., M. Feldblum and M. P. Smith, 2006. “The Human Face of Global Mobility: A Research Agenda,” in The Human Face of Global Mobility: International Highly Skilled Migration in Europe, North America and the Asia-Pacific, M. P. Smith and A. Favell (eds), Transaction, New Brunswick, NJ.

Fechter, A. and Hindman, H., 2011, Inside the Everyday Lives of Development Workers: The Challenges and Futures of Aidland, Kumarian Press, Sterling, VA.

Fechter, A., 2013, The Personal and the Professional in Aid Work, ThirdWorlds, Routledge, London.

Hugo, G., 2009, “Returning Youthful Nationals to Australia: Brain Gain or Brain Circulation?,” in Return Migration of the Next Generations: 21st Century Transnational Mobility, D. Conway and R. B. Potter (eds.), Ashgate, Farnham, Surrey, pp. 185-220.

Lewis, D. and D. Mosse, 2006, Development Brokers and Translators: The Ethnography of Aid and Agencies, Kumarian Press, West Hartford, CT.

Mosse, D. (ed.), 2011, Adventures in Aidland: The Anthropology of Professionals in International Development, Berghahn Books, London.

Nowicka, M., 2006, Transnational Professionals and their Cosmopolitan Universes, Campus Verlag, Frankfurt and New York.

Tung, R. L., 2008, “Brain Circulation, Diaspora, and International Competitiveness,” European Management Journal, Vol. 26, pp. 298-304.

Sheller, M. and J. Urry, 2006, “The New Mobilities Paradigm.” Environment and Planning A, Vol. 38, pp. 207-226.

吉原直樹（2013）「モビリティ・スタディーズから「移民の社会学」へ」，吉原和夫（編）『現代における人の国際移動：アジアの中の日本』，慶応義塾大学出版会，85-102 頁.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Yukimi Shimoda	４．巻 10 (1)
２．論文標題 Ethics and Identity among International Development Practitioners	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal f Business Anthropology	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Yukimi Shimoda
２．発表標題 Solidarity through intermittent interactions between Japanese development practitioners and Indonesian counterparts
３．学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), Inter-Congress 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukimi Shimoda
２．発表標題 Ethics and identity among international development practitioners
３．学会等名 The 8th International Conference on Business Anthropology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukimi Shimoda
２．発表標題 Non-family Transnational Emotional Bonds and Belonging
３．学会等名 American Association of Geographer Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukimi Shimoda
２．発表標題 Whose knowledge support development programs?
３．学会等名 XIX International Sociological Association (ISA) World Congress of Sociology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yukimi Shimoda
２．発表標題 What Are You Doing Now?: The Liminality of Subjectivity among Japanese International Development Professionals
３．学会等名 The Australian Sociological Association (TASA) Conference 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考